

いじむ

野口武久
(詩人)

こころはどこにあるの
と幼児が突然たずねる
陽の光がこぼれる
公園の砂場で
こころは形や色がないから
誰れも見たひとはいない
「こころをばなににたとへん
こころはあぢさゐの花」
といったのは詩人の萩原朔太郎だが
七色に変化する
魂の宿っているところにあるらしい
こころは悲しんだり よろこんだり
夜どおしいっぱい悩んだり
愛するひとを思いつづけたり
祈ったり 裏切られたり
そして疲れて眠るまで宙を舞う
ひとの一生が終るまで
こころは休むことをしない

第73号

涸林

SAKABAYASHI

随筆特集



晶子そしてフク・梅子のことなど

絵と文 〓 しこ名

はてな？郷土武者行列

断髮式

詩 〓 ころ

絵と文 〓 アルコール

ほろ酔い詩歌紀行

安森敏隆…9

堂昌一…8

高橋和島…6

池井優…4

野口武久…1

ごみの空間

伊勢田邦貴…14

バリ島で茶道

宮地智子…17

肥満の方は癌になりやすい？

杉本忠夫…19

内野潤子…15



絵と文 節分草 中西美子 21

古本と怪奇譚と大衆文学 志村有弘 22

「産霊の御霊」^{ムスビ ミタマ} 志村栄守 24

腕振りはやや控え目に 桐原良光 26

絵と文 レンタルビデオ 佐川毅彦 28

囲碁を打つ 新田啓造 29

絵と文 ウクライナにおける日本月間での展覧会 さかもとふさ 31

桜色の話題 永岡慶之助 32

小説 江戸神仏歳時記(14) 芝大神宮 郡順史 34

表紙・グラビア…ぎょうせん館

断髪式



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

得がたい経験をした。大相撲の力士の断髪式に出席、大銀杏に鉄を入れたのだ。断髪式といえば、功なり名を遂げた大関、横綱などが長年親しんだ国技館の土俵上で涙ながらにおこなわれるシーンをテレビや雑誌のグラビアで見たいことはあるが、自分が直接かかわるとは思ってもしなかった。だが今回引退する力士は現役中さしたる実績はない。むしろ無名といったほうがよい。四股名は若孜、最高位は前頭十二枚目、

しかも幕内在位はずか三場所に過ぎなかった。

若孜は高校横綱と大学横綱の二天タイトルをもつ父中尾三郎の長男として生まれた。中尾三郎は慶大在学中の一九五六年、その才能を見込まれ、メルボルンでおこなわれた第十六回夏季オリンピック大会にレスリングヘビー級代表として出場したほどだった。浩規少年のちの若孜はこどもの頃からそつした父の影響を強く受け、中学から本

格的に相撲を始めることになった。中学は相撲の名門明大中野、同期に花田光司君、のちの横綱貴乃花がいた。中学とはいえ相撲のレベルは高く団体戦のメンバーに選ばれるのも大変だった。若孜の短所は上背がないことだった。しかし無類の稽古熱心で高校に進学するころからぐんぐん力をつけ、大学は大相撲の力士も多く輩出している中央大学を選んだ。中大相撲部の中堅として鳴らし、全日本大学選手権の団体優

勝にも貢献した。

大学卒業後、日本通運に就職、アマ相撲界で活躍する道を選んだが、明大中野中学の同期が大相撲で活躍している姿をみて角界入りを決意、中大相撲部との縁が深かった松ヶ根部屋の門を叩いた。アマ時代の実績から幕下付け出してスタート、千葉県船橋市の部屋で稽古に励んだ。元大関若島津が起こした松ヶ根部屋は花籠、一所ヶ関といった歴史と伝統を持つ大部屋と違い、力士の数の少ない小部屋であった。四股名は最初本名の中尾でスタートしたが、縁起のいい名前をと考えた末若孜とした。

現役時代、毎場所番付を送ってくれた。十両優勝を果たし、幕内昇進が決まったときは、松ヶ根部屋からはじめて関取が出たと大喜びし、関係者が集まって盛大な祝賀会を浅草のホテルで開いた。だが、幕内の壁は厚かった。十両から幕内上がったといつて喜んだのもつかの間、落ちて番付の文字が小さくなったのを見て上背がないのが

ハンディかたがっかりするといった繰り返しだった。新弟子検査の折、身長は一七三センチ以上が条件であるにもかかわらず、一七二センチ(自称)で合格したのはアマ時代の実績が加味されたからであった。平成七年十一月初土俵、「もつとも背の低い力士」といわれながら、持ち前のフアイトと稽古熱心で十両優勝を飾るなど一生懸命土俵を勤めてきた。しかし怪我が多く、相撲人生をまっとうできないまま引退の日を迎えなければならなかった。

断髮式の会場となったのは、かつて勤務したことのある日本通運の大ホール。実績のある力士のように国技館を最後の花道とすることはなかった。会場の入り口には部屋の若いものが浴衣姿で出迎え、会場に入ると出身校明大中野、中大、後援会から現役時代に贈られた化粧回しが飾られ華やかな雰囲気がかもし出されていた。四〇〇人を超える出席者が次々と大銀杏に鉄をいれる。明大中野中学の土俵と一緒に汗を流した花田君もと横綱貴乃花が現

役時代からは想像できないほっそりとしたスリムな体型になって洋服姿で登場、中大相撲部の仲間の出島、玉春日は紋付、袴の正装で出席し、鉄を入れる。最後は松ヶ根親方による「止めばさみ」、鬻が切り落とされ、拍手とともに若孜の相撲人生は終わった。

別室でパーティ。中大野球部OBで巨人の五番を打ったこともある末次の姿もみえる。中学、高校、大学の校長、日本通運の社長が思い出話を交えながらつぎつぎと挨拶に立つ。呼び出しによる相撲甚句の披露、そして親方の感謝の辞に次いで本人若孜が鉄が入ってざんばら髪になった姿で出席者に対して土俵と決別する想いを語った。

三十三歳、独身。年寄株を手に入れることもなく大相撲の世界に別れを告げるが、中学時代から今日にいたるまで相撲を通して学んだ「心・気・体」を活かして第二の人生を歩むという。元関取に幸あれと会場をあとにしたのであった。

はてな？郷土武者行列



高橋和島
(作家・郷土史家)

わたしの住む町は昨年一月、隣町の（岐阜県）多治見市と合併した。したがって、当方は美濃東部に位置する人口十二万ほどの地方都市の一員になったわけだが、この田舎町では毎年、秋祭りに際し、武者行列が市中を練り歩く。

そこで、どんな顔ぶれの武者が登場するのかは、興味がなかったので、長年知らぬままに過ごしてきた。

ところが、町の一員に加わったことから市の広報で昨秋、知るところとなり、いささか首を捻ることに。印刷物に記載された順に登場人物を紹介してみよう。カッコ内は扮する人である。

ある。

多治見国長（市長）、土岐頼貞（市会議長）、足利尊氏（区長会長）、織田信長（公募または推薦、以下同）、豊臣秀吉、源義経、足利義満、新田義貞、細川勝元、土岐政頼、今川義元、土岐頼芸、以上のうち、一般的にあまり知られていないのは多治見国長、土岐頼貞、土岐政頼、土岐頼芸といつたところだろうが、国長は後醍醐天皇の倒幕計画・正中の変（一三三四年）で討ち死にした土岐一族の一人であり、苗字から見当がつくように鎌倉時代にわが町一帯を領有した人物。土岐頼貞は鎌倉末期に美濃守護を務めた男で隣町の瑞浪市

に館を構えた時期があり、墓も残っている。土岐政頼、頼芸は兄弟。戦国時代の美濃守護で、二人とも斉藤道三に国を追われた。頼芸が道三に与えた愛妾深芳野の産んだ子斉藤義龍は、頼芸の種ではなく、道三の子とされている。

美濃以外の地域の人には馴染みの薄い以上の四名を除くと、実に豪華な顔ぶれだ。

ここで、わたしが首を捻ったのは地元との関係である。信長らが多治見とどう関わったのか、浅学にして知らない。わたしだけではなく、市民のほとんどが知らないはずだ。

武者行列を見物にきた他地域の人に、

「信長、秀吉、義経、足利義満、新田義貞、細川勝元、今川義元とえらい豪儀なキャストやけど、この町と歴史上どついう関係がありますのや」と訊ねられたとする。おそらく答えられる市民は皆無に違いない。

しかも広報では「戦国武者行列」としているのに、義経が入っている。牛若丸さんも戦国時代の武将の一人に加えてしまったわけだ。

祭りの出し物であり、しょせんは遊びなんだから咎め立てする気はない。勝手に推測すると、多治見国長や土岐一族だけでは地味すぎて盛り上がりがない。やはり誰もが知っている武将を登場させたほうが華やかな行列になると市当局は考えたのではあるまいか。

だとすれば、場違いの源義経や足利義満などの代わりに武田信玄、上杉謙信といったところでもよかつたはずだが、なぜ牛若さんや室町將軍にしたのかはわからない。大物を求めて飛躍するのなら、いっそのこと、アレキサンダー大王がナポレオンでも登場させればよかつたのだ。

ばよかつたのだ。

もう一つ苦笑させられるのは行列の順序である。

見物に行つたわけではないので、正確な順序は知りえないが、武将に扮した市長や市会議長を後回しにすることは考えられないから、おそらく前述の市広報の記載順で町中を練り歩いたに違いない。となると、信長、秀吉、義経、義満らが多治見国長とやらいう歴史上ではその他大勢組に属する男の後ろをひよこひよこ歩いたのだろう。見物した大方の市民はきつと困惑するやら苦笑するやら、随分と落ち着かぬ気持ちになつたのではあるまいか。

話を多治見に隣接する（岐阜県）可児市に移すが、わが町同様の平成の合併で兼山という町と一緒になつた結果、明智光秀と森蘭丸がそれぞれ生まれたとされている二つの城跡を市内に抱えるに到つた。

つまり、同市は本能寺の変で討つた者と討たれた者双方のゆかりの町になつたわけだ。

さて、ここでも武者行列が行われてきた。ただし、登場するのは今のところ蘭丸だけで光秀は外されている。理由は彼が長年にわたつて逆臣扱いされてきたからだろう。

しかし、同市で光秀ファンは多いし、下克上の戦国時代に逆臣という理屈はおかしいとする考え方が市民の間に広がっている。

したがつて、そのうち、市民の中から蘭丸だけでなく、光秀も武者行列に登場させるといふ声があがる可能性は十分にある。

となると、光秀と蘭丸が仲良く同市内を練り歩く光景が実現することになるわけだ。

こうした武者行列には当然、納得しない人が出てくるに違いないが、わたしは理解不能の組み合わせの多治見の場合よりおもしろいと思う。

もつとも、なんでもありの郷土武者行列に市民の税金を使うのは、考えものかもしれない。

しこ名

堂 昌 一



私は、東京両国「国技館」の近くに
住んでおりますので、大相撲には大変
関心があります。今は以前ほど場所中、
毎日「満員御礼」の垂れ幕は揚りませ
ん、幕内上位を独占する「モンゴル」
を始めとする外国勢、がっぷり四ツの
熱戦は少く、当りもなく変化する内容
のない取組が多くなりました。

しこ名もなんとかなりませんか、「若
鬼馬」という中堅力士がいます、私は、
てつきりモンゴル出身と思っています
たが日本人しかも、なんと東京生まれ
なのです、江戸っ子らしい粋なしこ名
はないものでしょうか。

有望力士にも「豪栄道」「豊真将」三
字熟語とはいいたせんもう少し日本語
らしいしこ名はないものでしょう
か。

晶子そしてフク・梅子のことなど



安 森 敏 隆
(同志社女子大学教授)

(1) 新詩社の機関誌である「明星」は、一九〇〇(明治33)年四月、新聞紙型の十六頁ばかりの小冊子として刊行され、その後、版型なども変えられ一〇〇号までつづいた。

この「新詩社」の結成に至るまでに、雑誌「文庫」の投稿者たちや「堺文学会」の文学仲間や浪速青年文学会の機関誌「よしめし草」の同人たちが「明星」に関わってくるのである。そうしたなかにも鳳晶子があり、その晶子の中

心に山川登美子や増田雅子などが「明星」に参加していくことになるのである。

創刊一号には、評論、論説、講話、批評、随筆、中学教育に関する「中学時代」や「各中学校に於ける体育部彙報」などの教育の欄もあり、単なる文芸誌とはいえない側面をもっているが、なかでも「和歌壇新体詩壇」に重きを置くことが強調されている。この新聞紙型タブロイド版の「明星」が同年九

月の「第六号」からは、豪華な四六版(B五版)の雑誌に生まれ変わり、その「第六号」の「後記」に当たる「一筆啓上」には「本社の規則と申すものを社員協議の上左の通り改め申し候」と附して、新たに「新詩社清規」なるものが掲げられている。

— われわれは詩美を楽むべき天稟ありと信ず。さればわれわれの詩は道楽なり。虚名の為めに詩を作るは、われわれの恥づるところなり。「明星」

六号の「新詩社清規」)

第六号の「新詩社清規」の最初の項目に「われわれは詩美を楽むべき天稟ありと信ず」とあるように、最初のものから大きく改訂され、先ずは、各自の天稟(才能)をアピールし、それを高らかに主張することからはじめられているところにある。そのことによって、鳳晶子や山川登美子や増田雅子などの才能ある若き女性たちや、天稟ある若者・石川啄木、北原白秋などの青年たちが全国から自ら名乗りを上げて出てくるきっかけをつくったのである。その上で、「古人の詩を愛讀」、「自我の詩を發揮」、「新しき国詩」、「我儘者の集り」が主張され、自由な詩的集団と各自の自我の詩が求められ、飛躍的に文芸雑誌として発展していくところにある。また、雑誌「明星」の主宰者についても「与謝野鉄幹氏を推して社幹」から、「社友の一人与謝鉄幹」になり、創刊時の与謝野鉄幹一人の独断の社幹から社友と同等の一人としての社幹に民主化、平等化されていることである。

さらに、雑誌「明星」に投稿できる歌数も「短歌は二十首以内新体詩は二篇以内」から「詠草(和歌新体詩とも)の歌数には制限なし」と言う無制限のところはまだ自由に開放されていることが特筆される。

すなわち、一人一人「天稟」と「自我の詩」、「自我独創の詩」であることを高らかに主張し、さらにおのれたちの集団を「我儘者の集まり」として位置づけ、「社友の友情」を強調し、「去るものは追はず、来るものは拒まず」と一人一人の個性の尊重と才能を重視したのである。その上で、自由な集団であることを「明星」のひとつの大きな組織原理として、これまでの「堺文学会」や浪速青年文学会の機関誌「よしあし草」とは違う、師弟関係を中心におく、タテ的結合体(国崎望久太郎)から、仲間の一人一人の意識を中心におく、「ヨコの結合体」を企図し、来るべき二〇世紀にむけての新しい文学集団を打ち出し、鮮明にしていたのである。そして、これをもとに「明星」

が二〇世紀初頭の日本の文壇を席巻してゆくことになるのである。

(2) 二〇世紀の前夜である一九〇〇(明治33)年は、与謝野晶子こと鳳晶子が「明星」の歌人として出発した、まことに記念すべき年であった。また二〇世紀の日本の女性が社会に進出するきっかけとなった劃期的な年でもあった。女性の「生」と「性」をたからかいたった晶子の『みだれ髪』が生まれる前夜の一年が一九世紀末の最後の一九〇〇年という年であり、さらに特筆すべき女性の新しい挑戦と結果があったことも忘れてはなるまい。

一人は、函館の娼妓である坂井フクがおこした産業訴訟である。坂井フクがおこした訴訟は函館地方裁判所、函館控訴院の二度の裁判の敗訴の上、大審院で勝訴の決定が出された。一九〇〇年二月二三日に大審院が下した判決文には、「貸座敷営業者ト娼妓トノ間ニ於ケル金錢貸借上ノ契約ト身体ヲ拘束スルヲ目的トスル契約トハ各自独立ニシテ身体ノ拘束ヲ目的トスル契約ハ無

効ナリ」という一項目があり以降、娼妓の自由廃業運動が盛んになり、日本の社会のどん底であえいでいた女性たちが少しずつ立ち上がり自由を獲得していくことが認められた年でもある。

もう一人は、女子だけの英学塾を東京に創設した津田梅子である。津田梅子は、一八六四年十二月三日に江戸牛込町御徒町に佐倉藩士、津田仙の次女として生まれた。一八七一年に岩倉使節団の一行とともに、北海道開拓使派遣女子留学生五名のうちの一人として、六歳でアメリカ東部のジョージタウンに渡った一人である。そこで、初等中等教育、殊に英語はもちろん、フランス語、ラテン語、数学、物理学、天文学を学ぶ。十数年を過ごし帰国し、日本で私塾「桃夭女塾」「海岸女学校」などで英語を教えたり、学習院女学部から独立した家族女学校で英語教師をする。そして再び渡米したりしながら時を待ち、一九〇〇年七月、留学中に友達になったアリス・メイ・ベーン等の協力を得て、「女子英学塾」（現

在の「津田塾大学」を開講して塾長になるのである。ここに劃期的な日本における女子だけの英学塾が十名の入学者をもって始まるのである。

「二〇世紀の女性文学」を遠望するとき、十九世紀末の一九〇〇年における坂井フクと津田梅子ことは、明星の歌人・晶子の登場とともに記憶しておかねばならないことのひとつである。



ほろ酔い詩歌紀行



日高 昭二

(神奈川大学教授)

正月の祝いに、一家揃ってのむ酒に「屠蘇」がある。屠蘇散と呼ばれる薬を、酒やみりんに浸したもので、そのなかには山椒や蜜柑の皮や肉桂皮などが調合されていた。

この屠蘇散は、中国の三国時代(約一七〇〇年前)に華陀という医者が処方したもので、日本には平安時代に渡来したとされている。当時の中国で疫病が流行し、華陀の処方死者が蘇生したので、屠(死者)が蘇(蘇える)という

意味でこの名前があるという。しかし、正月に「屠」の字は不吉であるから、この字の上に朱点を打って、わざと戸冠にしたこともあるという。

一方、屠蘇の語源は、蒙古のことはトスウ・サラカッタの転音で、トスウは油、サラカッタは牛乳酒で、このことは中国に渡って屠蘇の語源になったという説もあるらしい。もっとも、中国では正月に屠蘇を飲むという習慣はなくなっているらしく、その処方は

むしろ日本において、さまざまな記録に残されているともいう。

その屠蘇を、日本で最初に飲んだという記録は、平安時代の嵯峨天皇の弘仁二年(八二一年)の記事に見えるという。おそらく、そうした宮中での習慣がやがて民間に広まったのであろう。その後、宮中の記録では、未婚の小女を撰んで薬子の役とし、その薬子がまず酒を嘗めて試みたのち、それを銀の器に注ぎ、宮中の鬼の間より天皇に進

呈したともされている。

さらに、大正の頃には、屠蘇酒のかわりに雉子酒というのを使用したという記事もあるらしい。塩焼きの雉子と焼豆腐を入れ、熱燗にした酒を注いだものだというのが、しかし、民間では、やはりあの三角の布に屠蘇散を入れたものを飲むのが、一般的なものとして知られていよう。最初の一杯は屠蘇酒で、あとは普通の年始酒になるというのも、年のはじめの風景であろう。

新玉の年の始と豊御酒の屠蘇に酔ひにき病いゆがに

正岡子規

豊酒の屠蘇に吾等へは鬼子ども皆死しにけり赤き青きも

斎藤茂吉

またひとつとりたくもなき齢かさねやむなく祝ふ屠蘇のめでたき

筏井嘉一

屠蘇酒に酔うにもあらず元朝の大き
昏迷に身を任せたり

三宅霧子

ことごとく日月はなごり元日の屠蘇
も餅も別れをふくむ

上田三四二

これらの歌には、正月の屠蘇を祝う儀式が、一年の邪気を払い、齢を延ばすという習慣を含みつつ、さまざまな表情をよく浮かべているだろう。なかでは、子規の歌がカリエスを病んで多く病臥のうちに暮らしたこの歌人の、平癒を願う屠蘇への思いを切実に示している。

また、上田三四二の新年の祝いの酒は、「別れをふくむ」という命の切迫した寂寥感をあらわして「屠身にしみる。そして、茂吉の歌にみえる、屠蘇によつて「鬼子ども皆死しにけり」という発想には、たとえば『御伽草子』などに記されているように、鬼に酒を呑ませて退治するという、昔ながらの発

想もひそんでいるだろう。

それで思い出すのは、『酒吞童子』の物語である。源賴光が、石清水八幡・住吉明神・熊野権現の化現した三人の翁から「じんべんきどくしゅ」という酒を授かり、悪神である酒吞童子を退治するといつ話である。「じんべんきどくしゅ」とは「神使鬼毒酒」で、本来は神への饗応としての酒を、悪神を退治するために使ったといつものである。つまり、酒は薬と毒のあいだを自在に変ずるといふわけであるが、もちろんそれは酒にはかぎるまい。

屠蘇すこしすぎぬと云ひてわがかけし羽織のしたの人うつくしき

与謝野鉄幹

こつなると屠蘇も、正月の儀式としての、邪気を払い息災を祈るといふ意味が薄れていて、濃密なロマンチズムだけがたちこめている。

アルコール

伊勢田 邦貴



女性がブランデーを飲んでいるところを描いているうちに、担当医から「アルコールは駄目ですよ」と云われたことを思い出してしまった。元々酒呑みでもなく年をとってからお付き合い酒が出来るようになった程度なのに、妙にがつくりしたものだ。よくある話で、止めれば別に問題はないのだが、一方では少し位は飲んだ方がかえって良いのではないかと云われ迷ってしまった。

お正月にお屠蘇（味醂が好きで）を内緒でチビチビ飲んでみたが特に異常はなかった。やれやれと気が楽になったのに、その後アルコールの入った料理を食べたところ、一発で悪性？不整脈が出て、考えてしまった。しかし納得いかないのもう少し様子を見ることにした。困ったものだ。

ごみの空間



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

先日テレビの報道番組を何気なく見ていたら、ごみを山のように家中に積んで暮らしている老いた女の人のことを映していた。

そのごみの量は、庭を埋めつくし、勿論家の中は足の踏み場もなく、台所の流しの上には数知れぬ食べた物の残骸があり、全く珍しい状態であった。

近所の人は、虫や匂いに悩まされて困っている。そして一度は区の人力で綺麗になったのに、再び次から次へ

とごみを増やして、又元の姿になってしまったらしい。

彼女は、自分の家のごみだけでは満足せずごみを出す日にごみ置場に行つて、よその家の大きなごみ袋をも漁つて持ち帰る。

テレビ局の若い男性アナウンサーがいろいろ話しかけたりすると、それなりの返事をして最悪の狂気の気配はない。

一度は精神家の医師が現れて、「今の

大臣は」などと聞くと、「小泉さんでしょう」と答えている。

またある日は、アナウンサーが彼女の誕生日を聞いていたらしく、ケーキを持って参上する場面もあった。彼女は大喜びで、ごみだらけの部屋の椅子に坐ったままケーキに蠟燭を立て、火を消すと重なったごみ袋の中から手探りで包丁を出しケーキを切つてこれも手探りの割箸で食べはじめた。

彼女の年齢が私に近いのが分かり、何となく慄然としてしまった。

そして尚も、ある時から濃厚な化粧をしながら派手な赤い帽子をかぶり、区の集会に参加したりするところも映されていた。

背中がひどく曲がり、手押し車で歩いている姿でも、何か自信のようなものさえ漂っているのである。

この人にも若い頃があったのだろう。そして今は誰もが清潔を愛し、悪臭やごみは悪(あく)の時代になってしまった。

ホームレスの人でさえ、清潔なダンボールの家の中でテレビを見ていると

いう変な時代になってしまっている。

この人のごみへの執着は異常ではあるけれども、現代の清潔への執着もや、異常と思わざるを得ない。男性もいい匂いの香料をつけて、昔の男の匂いなど毛ほどもない。

昭和はトイレの匂いだらけだったし、家には、その家の匂いがあった。

ごみは悪、匂いは悪、虫は悪の世の中ではごみの中で暮らす老女は、テレビで取り上げるには最も興味ある存在なのである。

ごみを一つずつ取り上げ虫の湧いた袋を映す。微に青くなったパンを映す、若いアナウンサーの悲鳴を映す。

人の悲しみや、孤独や、背の曲がった彼女の老いの姿は、ここでは狂気と悪の権化なのである。

自分はそのではない、私はもつと清潔だという安心感と、ここまでは老いていないという優越感が込み上げてくる。

自分では平気であるのに、外から見た自分はこのようにみちめに汚いのか、

ということに老女は気付いていない。

老いというのは、孤独というのは、こんな無惨な姿になることもあるのだという気持ちが残った。

夫が亡くなり二階に娘夫婦が同居している私は、幸せな老後と思われているが庭の雑草を抜きたいと思っても、本当に少しづつしか思いがとげられない。

かろうじて台所の仕事だけは、自分の生命のために心をこめて作っているが、ごみなどはいつも娘に出してもらった。たった一人だったら私もまたごみに埋まるかもしれない。

若い頃は、掃除が好きで朝夕廊下を拭いていた。中廊下は、毎日おからで拭き込んだりして、庭も芝を植えて夫がいつも刈り込んでくれていた。

今は好きな野草が一面に広がって、芒、藤袴、水引草やほととぎす、現の証拠などが足の踏み場なく繁ってしまう。

繁った野草は、四季折々花を咲かせてる。

虫は好きで、自分で鈴虫を取り寄せ毎年ふえ続けて、今年も六つの籠に数えきれぬ程解し、十月末まで鳴いてくれる。

蛙が棲み、守宮が棲み、緑いろのばつたも絶えることなく年々庭中に孵っている。

守宮は門燈の周りに棲んでいて、小さい子供の守宮が門柱の木肌を滑り下りて来る。

それが可愛いと思って暮らしている。思い返せば、戦中戦後の暮らしから、今は遠く遠く隔ってしまった。

あの頃は、食べるものもなかったのでも、ごみが出る余裕もなかったのである。

人は本来、空間を埋めたいという願望を持っているのではないだろうか。

老女はたまたまその対象がごみであった。汚いとか、臭いとかを忘れて自分がごみに囲まれて安心を得ていたのだらう。

草や虫に埋もれて安心している自分と同じように。